

第1回資源管理方針に関する検討会
 (マサバ対馬暖流系群・ゴマサバ東シナ海系群)
 【議事概要】

令和元年7月24日
 水産庁
 (令和元年7月26日更新)

1. 日程 令和元年7月22日(月)～24日(水)
2. 場所 福岡国際会議場(福岡県福岡市)
3. 出席者
 水産庁:神谷資源管理部長、江口漁場資源課長、岩本資源管理推進室長ほか
 水研機構:西田中央水研資源研究センター長ほか
 上記のほか、漁業者、漁業者団体、研究者、行政官等、計115名

4. 概要

≪1日目:7月22日(月)≫

(1)水産庁より、資料4を用いて改正漁業法下における新たな資源管理について説明。

【主な意見】

- 資源評価の基となる漁獲情報の収集方法について、漁業者と水研の研究者のつながりを改善することは重要。現在は、現場と水研の関係が少ないと感じる。
- 目標管理基準値の案としてのMSY水準は幅を持つものなのか。
- 資源を持続的に利用していくため、利害を超えた活発な議論の場として検討会は必要である一方、それぞれの立場における利害調整も必要。
- 資源管理目標や漁獲シナリオは毎年変わるのか。
- 資源ごとに資源管理目標や漁獲シナリオは設定するのか。
- 今回の検討会に境港の加工流通関係者が参加していない。参集範囲をもう少し広げてほしい。
- 水域に魚はいるが、操業は行わない状況は資源評価に反映されているのか。
- 限界管理基準値の案をMSYの60%を実現する資源量水準としているが、これが基本となるのか。

(2)水研機構より、資料5-1に用いて資源評価に係る基本事項について説明。

【主な意見】

- 小型魚を獲り控えている状況において統計は信頼できるものとなっているのか。
- 毎年獲れるサバは同じサイズである現象の理由を説明して欲しい。
- 卓越年級はなぜ発生するのか。
- 近年、卓越年級が発生したと認識しているが、資源評価に反映されているのか。
- 海域別管理や、マサバとゴマサバを区別して管理することについても議論が必要ではないか。
- これまでの管理と何が変わるのか。これまでの基準で神戸チャートを作成できないものなのか。
- 神戸チャートの見方について、可能な限り真ん中の交点付近にある状態が最も望ましいのか。
- β の扱いについて、目標管理基準値まで回復したのちは $\beta = 1$ で良いのではないのか。

《2日目：7月23日（火）》

(1)冒頭、1日目の議論を総括。

(2)水研機構より、資料5-1を用いて、マサバ対馬暖流系群及びゴマサバ東シナ海系群の平成30年度資源評価結果について説明。

【主な意見】

- 中国の漁獲は評価に含まれていないが相当獲られているのでは。資源評価や分析について共同で取り組むことを先方にアプローチすべきではないか。
- マサバ対馬暖流系群について、95年に資源量は急減した一方で漁獲割合は横這いで推移しているが、環境変動の影響の方が大きかったと解釈すれば良いか。
- マサバ対馬暖流系群について、95年以降資源が上向きにならない理由は卓越が発生しても漁獲が強く、そこに環境要因が絡んだからだと解釈すれば良いか。
- マサバ対馬暖流系群について、Blimitを長年下回っていたにも関わらず資源が増加した理由を説明して欲しい。
- マサバ対馬暖流系群とゴマサバ東シナ海系群については、Blimitと限界管理基準値では算出の考え方が変わったということか。

(3)水研機構より、資料5-1を用いて、マサバ対馬暖流系群及びゴマサバ東シナ海系群の再生産関係の適用・管理基準値案の検討結果について説明。

【主な意見】

- マサバ対馬暖流系群について、1989年の資源量が多いものの、加入量が低いのはなぜか。
- マサバとゴマサバで、MSY水準とMSYとの関係に逆転現象が起きている。マサバはMSY水準よりMSYが大きい、ゴマサバについては逆となっている。
- 再生産関係のグラフの折れ点の資源量がMSY水準ならないのはなぜか。
- 限界管理基準値をMSYの60%とした理由を説明して欲しい。従前のBlimitの決め方の方が感覚的に理解しやすかった。
- 再生産関係について、加入に合わせて、親魚量も尾数で示すことは可能か。
- 今までの管理との関係が明確ではない。今までの管理は間違っていたのか。これからの管理を過去に当てはめるとどうなるのか。
- マサバ対馬暖流系群について、安定した加入が見込める最低限の親魚資源量の数値が引き下げられたが、これは過去、もっと漁獲できたものが獲れなかったことを意味しているのではないか。
- 10年前に今後の管理を行った場合にどうなっていたかシミュレーションを行ってほしい。
- 期待できる漁獲量は、日本と韓国を合わせたものか。
- 韓国もMSY水準を目指すとしていたと聞いているが、資源評価における研究者レベルでの共通認識はあるのか。
- マサバについては、寒冷期は資源水準が高く、温暖期は減少していると認識している。将来予測において環境の変化は考慮されているのか。理論上は寒冷期と温暖期は切り分ける形が望ましいのではないか。環境が変わるのであれば管理の形も変わるのではないか。
- FMSYで管理するのではダメなのか。

(4)水研機構より、資料5-1を用いて、マサバ対馬暖流系群の漁獲シナリオについて説明。

【主な意見】

- 漁獲量予想値について、消化率は考慮されているのか。獲らない分はどのように反映されるのか。
- 漁獲量が減れば、獲り残しかどうかわからないので、資源量が減ったと判断されるのではないか。
- β を1以上としたシナリオ、0.85 など数字を細かく刻んだシナリオ、2030年に50%の確率で目標管理基準値まで回復させるシナリオを追加してほしい。
- $\beta = 0.8$ より低いシナリオは不要では。
- $\beta = 1.0$ で良いのではとの意見が出てくるのではないか。また、漁業者向けの説明として、特に漁獲量を削減する場合には何年後に何トン漁獲できるようになるか示して欲しい。
- (上記意見に対し)元本を維持しつつ、漁獲を増やせるとの説明で対応できるのでは。
- 混獲の管理はどうするのか。
- 現状のFがMSYを実現する水準とされているが、大中型まき網漁業については現在盛漁期に半数が太平洋に移動しているなど特殊な状況にある。
- 漁獲量予想値の表について、漁獲量が減少しているシナリオがある。
- 規則の性質上、漁獲圧力を減らしても数年では目だって資源量の回復は見られないが、その後は回復していくと理解して良いか。
- β が一定のシナリオしかないが、途中で β を変えるシナリオもアイデアとしてあるのでは。例えばMSY水準まで資源が回復したら β を変えても良いのでは。
- Fの削減方法として、一律ではなく、小型魚分を減らすというやり方もあるのでは。小型魚の獲り控えは現場で広く取り組まれている。

(5) 水研機構より、資料5-1を用いて、ゴマサバ東シナ海系群の漁獲シナリオについて説明。

【主な意見】

- 漁獲情報などが不足していることは理解するが、中国船の影響を考慮しない資源評価やこれに基づき算出されるMSYの数字などに対して信じてよいのか不安がぬぐえない。どこかで考慮してほしい。日韓についても、データは使用されているものの資源状態について共通認識が形成されていないとの説明を受けた。日本だけが厳しい資源管理に取り組む意義についてどうしても疑念を抱かざるを得ない。少しでもこの不安を解消させて頂く話はないものか。
- 我々が新たな資源管理に取り組むことを中国に対し資源管理を求めていく際の材料に使って欲しい。
- 現状、管理はサバ類として行っているが、マサバとゴマサバで分けていくことが望ましいと考えるか。
- ゴマサバは混獲されるものであり狙って獲っていない。マサバを管理すれば、ゴマサバも管理できるのではないか。
- 資源管理目標や漁獲シナリオについて、資源管理方針に定める前に漁業者・業界側が判断できる材料を幅広く提供してほしい。全国画一で取り組めるものと地域ごとに取り組むものとのズレが生じる事例も想定される。資源状況によっては、目標達成に向けた支援策の議論もあると思う。
- 改正漁業法の施行のタイミングに合わせて、海域別の管理や資源別の管理を導入していくのか。
- マサバとゴマサバと分けて管理することについては慎重に検討して欲しい。特に、ゴマサバについては、再生産関係の不確実性が特に大きい。リスクに配慮するあまり数字が過度に抑えられているのではないか。

(6)議長より、結果の取りまとめの案及び次回会合への宿題について説明。

【主な意見】

- 特にゴマサバについては、中国による漁獲圧力が無視できないことを特記事項として書き込んで欲しい。
- 令和元年漁期から太平洋側と日本海側で分けて管理することになったが、太平洋側の資源量の方が大きいため、日本海側の都道府県、大中型まき網の配分数量は従前より少なくなった。鹿児島県に属する海域は評価上日本海側に分類されているが、実際には双方の系群を利用している。海域の特性を踏まえた柔軟な TAC 制度の運用を重ねて欲しい。

≪3日目：7月24日(水)≫

(1)冒頭、2日目の議論を総括し、第2回検討会に向けた宿題の確認を行った。

以下の2点について、進め方を確認。

1. 追加シナリオとして、以下の5パターンについて、次回検討会までの宿題とすること
 - ① β の値を刻んだ場合 ($\beta = 0.80, 0.85, 0.90, 0.95, 1.00, 1.05$)
 - ② 2030年にMSY水準の親魚量の達成確率が50%となる場合
 - ③ 小型魚のFを削減した場合(過去のFの傾向を考慮。)
 - ④ 規制を徐々に強める場合
 - ⑤ 最初は厳しくし、一定期間後、制限を緩和する場合
2. 上記の計算は、目標管理基準値と限界管理基準値については、水研機構から提案された数値(マサバ対馬暖流系群(目標管理基準値:約31万トン、限界管理基準値:約14.3万トン)、ゴマサバ東シナ海系群(目標管理基準値:約10.9万トン、限界管理基準値:約5.1万トン))で、進めていく。

(2)水産庁より、資料4を用いて、今後の進め方について説明し、第2回検討会の日程については、今回宿題となった事項の作業状況を考慮しつつ、開催の約3週間前を目途に発表することとなった。

【主な意見】

- 特にゴマサバについては、漁獲海域における中国船の操業の影響が懸念されることから、管理基準値の値についてももう少し議論したい。水研機構から提示された数値で追加シナリオ等の計算を行うことはいいが、これで決定とはしないほしい。
- 安全率(β)について、資源評価だけでなく、管理においても安全性を見込んだ措置が講じられていることにも留意すべき。
- 資源管理分科会に設置された「くろまぐろ部会」のような議論の場も設けてほしい。
- 検討会とは別に、関係者向けの説明会を開催してほしい。
- 中国、韓国に対する資源管理への協力を働きかけて欲しい。
- 有意義な議論が行われていることから、加工流通業者や市場関係者など、広範な関係者への周知方法について工夫してほしい。
- 議論の様子を動画撮影し、ホームページで公開するなど検討してはどうか。
- 知事許可漁業者、沿岸漁業者には県を経由して伝わることになるが、数年で異動してしまうため伝え方に工夫が必要。
- 今回県からも案内はしたが、中々それだけでは足りない部分もある。次回以降は具体的な管理方策にも関わる話なので、全漁連から各都道府県漁連にもアナウンスをすべき。
- IQなど資源管理が高度化してくると今まで以上に数量の獲り残しが発生することが想定されるが、漁獲実績が減少すると資源量が減少するのではと不安に思う関係者が多いので、獲り控えが資源量に転化していくことについて、今回示した資料(注:資

料4の 14 枚目「(参考)資源尾数の求め方(コホート解析)について」を用いて分かり易く説明して欲しい。

- 外国漁業の影響がある中で日本が MSY を目指して管理しても、MSY が達成できるのかは疑問。特にゴマサバに関しては、主漁場である東シナ海南部の沖合域が中国漁船に占拠されている状況の中で日本漁船は中国漁船を避けながらの操業を余儀なくされている実態にある。こうした中国漁船の実態を前提に、自分達だけで本当に MSY を達成できるものか次回の機会に説明して欲しい。
- 漁獲量の増大だけでなく漁獲金額の増大に関する情報も今後提示してほしい(大型魚が増えるのであれば、より生産金額は増大するはず)。

以上のように議論を行った結果、水研機構で追加シナリオを宿題としつつ、その計算は水研機構から提示された数値で進めていくこととなった。

また具体的な管理については、第2回検討会において議論していくこととなった。